令和５年度　学校経営計画に対する最終評価報告書

石川県立金沢錦丘高等学校

【重点目標1】 中高一貫教育の特長を生かし，将来を見据えた進路目標に向かって自発的に取り組むことのできる生徒を育成する。

具体的取組	主担当	達成度判断基準	備考	集計結果	分析（成果と課題）及び今後の対応
①中学校との情報交換や指導記録も適切に踏まえ，学級担任や学年主任等による積極的な面談を行う。	各学年	「ホーム担任や教科担任との面談によって，自分の学習姿勢や進路選択に良い変化が生まれた」と思う生徒の割合が Ａ　80%以上である Ｂ　70%以上である Ｃ　60%以上である Ｄ　60%未満である	生徒アンケート（７月・１２月）により評価する。	(7月)肯定的回答81.4% 「よくあてはまる」31.4% 「あてはまる」　50.0% (12月)肯定的回答80.8% 「よくあてはまる」33.4% 「あてはまる」　47.4% 【判定：Ａ】	肯定的評価の割合は7月より微減であるが、「よくあてはまる」と回答した割合が昨年度23.1%→今年度7月31.4%→12月33.4%と増加した。ホーム担任や教科担任のきめ細かな指導の成果だと考えられる。生徒の考えを引き出し、適切な助言によって生徒の気づきを生み出すような面談の実践を通して、学習への内発的動機付けを行うことを意識していきたい。
②学校ＨＰや学年通信，各種便り等を通して保護者に学校の様子を伝えるとともに，ＰＴＡ活動や学校行事への参加拡大を図り，家庭との連携を強める。	総務課	「学校のＨＰや学年通信，行事案内など，学校からの情報を見ている」保護者の割合が Ａ　80%以上である Ｂ　75%以上である Ｃ　70%以上である Ｄ　70%未満である	保護者アンケート（７月・１２月）により評価する。	保護者ｱﾝｹｰﾄ 「学校からの情報を見ている」 （7月）（あてはまる+ややあてはまる72.5%） （12月）（あてはまる+ややあてはまる72.3%） 【判定：Ｃ】	肯定的回答は昨年度7月68.6%、12月69%に比べると若干高い評価となった。しかし、26.5%の保護者の方が「あまりあてはまらない」「あてはまらない」と回答している。学校行事や部活動等、生徒たちの活動が定期的に発信されていないことが原因と考えられる。タイムリーな記事の掲載により学校ＨＰを頻繁に更新し、積極的な情報発信を行っていきたい。
		ＰＴＡ主催の行事に参加する保護者の数が，延べで Ａ　1,000人以上である Ｂ　800人以上である Ｃ　600人以上である Ｄ　600人未満である	各行事の参加者数を集計し，評価する。	PTA主催行事に参加した保護者の延べ人数は、現在809人である。 【判定：Ｂ】	今年度は、昨年度まで動画配信となっていた保護者のための進学講座を実施することができ、330名の保護者に参加していただくことができた。PTA役員の方々の積極的な取り組みのおかげである。来年度に向けて、PTA役員の方々と協議を重ね、多くの保護者が参加できるよう、内容を工夫していきたい。
③中高一貫教育校として６年間を見通した学習指導や進路指導を行う。	教務課	「中高一貫教育校として，６年間を通じた指導方針や指導方法の共通理解と実践に取り組んでいる」と思う教員の割合が Ａ　60%以上である Ｂ　50%以上である Ｃ　40%以上である Ｄ　40%未満である	教員アンケート（７月・１２月）により評価する。	教員アンケート（12月） 肯定的回答52.6% 「あてはまる」17.5% 「わりとあてはまる」35.1% 【判定：Ｂ】	肯定的回答は、41.0%(R4) → 52.6%(R5)と増加した。総合的な探究の時間の課題研究において、中高合同での発表会や活動内容のポスター掲示などを行ったことで、教員の共通理解を図ることができたと思われる。 課題研究を柱としてその他の教育活動においても中高一貫教育校としての取組をさらに進めていきたい。
		目標時間を達成している生徒の割合が Ａ　70%以上である Ｂ　60%以上である Ｃ　50%以上である Ｄ　50%未満である	生徒アンケート（７月・１２月）により評価する。	生徒アンケート（12月） 平日の目標時間達成割合 49.1% 1年：62.9%，2年：42.7%， 3年：41.6% 【判定：Ｄ】	平日の目標時間は、1年：2h、2年：2.5h、3年：4hである。 目標時間達成者の割合は、40.7%（前期）→ 49.1%（後期）と増加しており、生徒の学習意識の向上とともに、成果が現れつつある。 次年度は達成割合をさらに向上させるために、進路目標をより具体的にすることで、さらなる家庭学習の充実を図っていきたい。

④	いじめやネットトラブル等に関する校内研修や講習会を実施し，生徒のトラブルについて予防的対応を行うとともに，問題行動の早期発見を図る。	生徒指導課	いじめやネットトラブルの予防指導の必要性を理解し，「実践している」「ほぼ実践している」教員の割合が A　90%以上である B　80%以上である C　70%以上である D　70%未満である	教員アンケート（７月・１２月）により評価する。	教員アンケート（12月） **肯定的回答93.0%** 「あてはまる」31.6% 「わりとあてはまる」61.4% 【判定：A】	今年度も１年生を対象に「スマホ安全教室」「ＳＯＳの出し方教室」を実施した。また、「いじめに関するアンケート」（５月１０月実施）や担任による面談等を通して生徒の状況を把握し、些細な変化も見逃さないようにしてきた。 今年度のいじめの認知件数は１件で、昨年の４件から減少した。これは早期発見、早期対応の未然防止体制の成果であると評価できる。 職員アンケートの結果によると、予防指導を「実践している」は93.0%で、昨年の88.0%から上昇しており、教職員の意識が向上していることがうかがえる。今後もいじめやネットトラブルの予防の観点から、問題行動の未然防止及び早期発見・早期対応に努めていきたい。
⑤	生徒一人一人が自発的に挨拶できるような雰囲気を醸成し，気持ちよく授業を受けられる環境を整える。	生徒会課	「学校生活において，挨拶を積極的に行っている」生徒の割合が A　80%以上である B　70%以上である C　60%以上である D　60%未満である 「校外からの来校者にも積極的に挨拶している」生徒の割合が A　70%以上である B　50%以上である C　30%以上である D　30%未満である	生徒アンケート（７月・１２月）により評価する。	生徒アンケート（12月） 「学校生活において、挨拶を積極的に行っている」生徒の割合 **75.4%** 【判定：B】 「校外からの来校者にも積極的に挨拶している」生徒の割合 **46.8%** 【判定：C】	どちらの項目も前期より微増している。教員の声掛けに応える挨拶は爽やかにできている生徒が多いが、自発的な挨拶はまだ積極的とはいえない。今後も授業時や部活動、学校行事等あらゆる場面で挨拶による良好な人間関係づくりを促し、すべての生徒が自発的に挨拶できるようにサポートしていく。
⑥	担任，学年団，生徒指導室，保健室，相談室，部顧問が十分に情報を共有し，課題や悩みを抱えた生徒を早期に発見し，自発的解決に向けて協力する。	保健・相談課	「関係教職員の情報共有により，問題を抱えた生徒を早期に把握し対応している」と思う職員の割合が A　90%以上である B　80%以上である C　70%以上である D　70%未満である	教員アンケート（７月・１２月）により評価する。	12月職員アンケート（昨年同期） 「対応することができている」98%（96%） よくできている51%（41%） ＋ほぼできている47%（55%） 【判定：A】	肯定的評価の割合は、昨年と同様、90%を超える高い数値を維持している。本校では、生徒個々の状況を把握し、職員間で共有する姿勢が貫かれており、全職員が様々な機会を捉えて、問題を抱えた生徒の早期発見と支援に努めている。今後とも、保護者や外部機関との連携も含め、組織的な協力体制をより一層向上させていきたい。
⑦	高校で求められる知識・教養・感性を身に付け，文章の理解力・表現力を育成するために読書を奨励する。特に，各教科と連携し，読書指導を授業やシラバスの他，あらゆる機会をとらえて行うことによって推進する。	生徒会課 各学年 各教科	「授業で図書を紹介するなど，生徒の読書量を増やすための指導をしている」と思う教員の割合が A　60%以上である B　50%以上である C　40%以上である D　40%未満である	教員アンケート（７月・１２月）により評価する。	教員アンケート（12月） **肯定的回答40.6%** 「あてはまる」3.8% 「わりとあてはまる」36.8% 【判定：C】	前期よりも微増したが、変わらず低い値となっている。かつて行われていた本を利用した調べ学習や探究活動などが、ほぼchromebookで行われることとなってきたことも本と触れ合う機会や教員からの指導の機会が減少してきている要因の一つであると考えられる。将来を考えるヒント、様々な人の考え方の違い等、読書することでたくさんの気づき感じてもらえるように、引き続き選書会や読書会を企画し、生徒の希望図書をアンケートするなどの方策も取り入れていく。

【重点目標2】 教科・科目等における指導を通して，深い思考力やコミュニケーション力などの向上を図るとともに，これからの社会の変化に柔軟に対応できる力の伸長に努める。					
	主担当	達　成　度　判　断　基　準	備　　考	集計結果	分析（成果と課題）及び今後の対応
①ＩＣＴの効果的な活用やアクティブラーニングの手法を取り入れながら授業研究に取り組み，生徒に基礎的・基本的な事項を確実に習得させるとともに，論理的思考力や表現力の育成を図る。 また，各教科の特質を踏まえた言語活動を通して，「コミュニケーション力」の育成を図る。	各教科	「他の教員の授業を参観したり，自分の授業を参観してもらった上で意見を伺ったりして参考になったと思える回数が，錦丘中との交流を含め，年間４回以上あった」と思う教員の割合が Ａ　70%以上である Ｂ　60%以上である Ｃ　50%以上である Ｄ　50%未満である	教員アンケート（７月・１２月）により評価する。	教員アンケート（12月） 「４回以上」　26.3% 「３回」　21.1% 「１～２回」　52.6% 「０回」　0% 【判定：Ｄ】	互見授業については、７月は「他教科を参観することで別の視点から授業を見直すこと」、１１月は「自教科を含め自由参観することで様々なスキルを高めること」を目的として行っている。 互見授業の実施回数が増えない原因として、７月の実施時期が学期末の校務と重なることが考えられる。次年度は実施時期を早めることで、落ち着いて互見授業ができるように計画していきたい。
		「ＩＣＴを活用した授業により，学習効果が高まっている」と思う生徒の割合が Ａ　80%以上である Ｂ　70%以上である Ｃ　60%以上である Ｄ　60%未満である	授業評価（７月・１２月）により評価する。	授業評価（12月） 「高まっている」81.0% （あてはまる50.5%＋ややあてはまる30.5%） 【判定：Ａ】	肯定的回答が、79.0%(R4) → 81.0%(R5)と昨年度とほぼ同じ値であった。 すべての教科においてＩＣＴを活用した授業は定着してきており、生徒は学習効果が高まっていると回答している。今後は、双方向のやりとりなどを取り入れて、教員側からみても学習効果が高まっているような授業作りを目指していきたい。
		「授業の中に思考を深める場面がある」と思う生徒の割合が Ａ　90%以上である Ｂ　80%以上である Ｃ　70%以上である Ｄ　70%未満である	授業評価（７月・１２月）により評価する。	授業評価（12月） 「場面がある」86.1% （あてはまる52.2%＋ややあてはまる33.9%） 【判定：Ｂ】	肯定的回答が85.0%(R4) → 86.1%(R5)と目標値にさらに近づいた。 各教科が主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善に取り組んでいる成果と思われる。今後もこの取り組みを継続していくとともに、知識を関連付けて深く思考させたり、問題を見いだし解決策を考えさせたりするなど、探究的な学習活動を取り入れた授業改善に努めていきたい。
		「この授業では、話し合い、発表、質問、実験・実習など、自分の言葉で考えたことや思いを伝える場面がある」と思う生徒の割合が Ａ　90%以上である Ｂ　80%以上である Ｃ　70%以上である Ｄ　70%未満である	授業評価（７月・１２月）により評価する。	授業評価（12月） 「場面がある」81.8% （あてはまる50.3%＋ややあてはまる31.5%） 【判定：Ｂ】	肯定的回答は81.0%(R4) → 81.8%(R5)と昨年度とほぼ同じ値であった。 学校全体としては「協働的な学び」への取組はほぼ定着してきているものの、否定的な回答の割合が高い教科もあった。授業中の教員からの働きかけがうまく伝わっている生徒とそうでない生徒がいるためだと思われる。生徒の様子を見取り、効果的な発問になるように改善していきたい。
②教科や総合的な探究の時間の内容を関連させ，表現トレーニング，プレゼンテーション，多文化共生理解などに取り組むことで，論理的・批判的に事象をとらえ，自らの考えを述べる力を育成する。	教務課	「さまざまな世界的・社会的事象に対して，より関心を持つようになった」と思う生徒の割合が Ａ　70%以上である Ｂ　60%以上である Ｃ　50%以上である Ｄ　50%未満である	生徒アンケート（７月・１２月）により評価する。	生徒アンケート（12月） 肯定的回答73.7% 「よくあてはまる」22.0% 「あてはまる」51.7% 【判定：Ａ】	肯定的回答は70.0%(R4) → 73.7%(R5)と増加した。 総合的な探究の時間の課題研究が軌道にのってきたことが要因のひとつとして考えられる。育成方針としてある「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」の３つの力の醸成を目指し、課題研究を軸として、全教科において探究型学習が広がるように進めていきたい。

③	生徒自らが設定した進路目標の実現に向けて，学習意欲の向上を図るとともに，教員のサポート体制を強化する。	進路指導課	３年次４月の進路志望調査と卒業時の進路を比較し，その学問領域等が一致している割合が Ａ　65%以上である Ｂ　55%以上である Ｃ　45%以上である Ｄ　45%未満である	進路志望調査と進路結果により評価する。	３年次４月の進路希望調査と卒業時の進路先の学問領域等が一致していた生徒は62.5%であった。 【判定：B】	約３分の２の生徒が３年４月の進路希望と同じ学問領域または学部が変わっても進学希望の大学に進学している。残りの３分の１の生徒は、当初とは別の分野へ進学した。それは高い目標を設定していたが、現実の成績等を鑑みて進路変更をした。また、なりたい自分になるために、更にもう１年頑張り、再チャレンジすることを決めたという生徒がいることは昨年度と変わらない。１年次より、大学の学部学科だけでなく教授の研究と世の中にある様々な職業との関わりについて理解を深め、将来の自分の姿をイメージすることができるよう、キャリア教育を充実させる必要がある。
			今年度で学力を伸ばした１年生の生徒数が Ａ　180名以上である Ｂ　160名以上である Ｃ　140名以上である Ｄ　140名未満である 今年度で学力を伸ばした2年生の生徒数が Ａ　120名以上である Ｂ　100名以上である Ｃ　80名以上である Ｄ　80名未満である	進研模試（7月と１月，もしくは11月）により評価する。	今年度1月外部模試までで学力を伸ばした１年生の生徒数は190名であった。 【判定：Ａ】 今年度1月外部模試までで学力を伸ばした２年生の生徒数は135名であった。 【判定：Ａ】	各教科偏差値結果で、７月外部模試と比較して１月外部模試で成績が伸びた生徒の人数は次の通りである。１年生国語１７１名、数学２０９名、英語１５０名。２年生国語１７２名、数学１６７名、英語１１９名であった。 基本的生活習慣を身に付け、予習・授業・復習の黄金のサイクルを確立させること、そして主体的に学習に励むような進路目標を持たせるよう、これからも様々な仕掛けを実施したい。さらに、生徒の実情を把握しつつ、適切な学習指導を行っていきたい。

【重点目標3】 多忙化改善に向けた教職員の意識改革を図るとともに，業務の平準化や部活動指導の効率化など，校内における勤務状況の改善を推し進める。

	具体的取組	主担当	達成度判断基準	備考	集計結果	分析（成果と課題）及び今後の対応
①	多忙化の大きな要因となっている部活動において，限られた時間の中で活動を行う。	生徒会課	１，２年生で「勉学と部活動の両立ができている」と思う生徒の割合が Ａ　70%以上である Ｂ　60%以上である Ｃ　50%以上である Ｄ　50%未満である	生徒アンケート（７月・１２月）により評価する。	生徒アンケート（12月） １．２学年 肯定的回答46.8% 「よくあてはまる」13.5% 「あてはまる」33.3% 【判定：Ｄ】	スポーツ庁より指定されている部活動時間や、完全下校時刻はほぼ守られている。部活動と家庭学習の両方の時間が充実したものになるよう、顧問や担任の面談や声かけを通して、生徒の集中して物事に取り組み時間の使い方をコントロールする力を育成する。
②	時間外勤務や会議時間の短縮，効率化に学校が一丸となって取り組み，多忙化改善に向けた教職員の意識改革を行う。	総務課 管理職	「業務の効率化やタイムマネジメントに関する意識を高めた」と考える教員の割合が Ａ　95%以上である Ｂ　90%以上である Ｃ　85%以上である Ｄ　85%未満である	教員アンケート（７月・１２月）により評価する。	教員アンケート（１２月） 肯定的回答80.7% 「あてはまる」31.6% 「わりとあてはまる」49.1% 【判定：Ｄ】	７月のアンケートでは肯定的回答は67.2%であり、やや改善は見られるものの、まだ目標は達成できていない。勤務時間調査の結果によると、時間外勤務は減少傾向にある。休みやすい環境作り、メリハリのある勤務の推奨等、引き続き業務の効率化の工夫を行っていきたい。

学校関係者評価委員会の評価	○地域との交流の機会を増やすなど、昨年度学校評議員会で出た提言に対しての対応が早くて良い。 ○学校評価アンケートの目的を明確にし、その結果を生徒、保護者にフィードバックし、改善する仕組みがあるとよい。 ○自発的な学習を進めるためにはキャリア教育が重要である。家庭学習については、時間のみを考えるのではなく、何を行うかが大事である。大学生になるときに、余裕を持って学習を楽しめる素地を育んで欲しい。 ○中高一貫教育校の特色を生かし、中高の実質的な関係がつくられ、取組が進められていることがアンケート結果に表れている。アンケート結果などにより内進生と外進生の特色などを分析し、それを生かす対応を考えると良い。 ○多忙化改善が進められており、今後も期待している。
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方法	○全教職員がスクールミッションを理解し、教育活動を行っていけるよう周知徹底する。 ○中高の連携については、具体的な取組を一つ一つ進めていく。また、中学生と高校生の交流だけでなく、内進生と外進生の交流をとおして、互いに良い影響を与え合えるような取組を考えたい。 ○探究型学習を通して生徒が自分の興味があることを見つけ、主体的に学び続けていけるよう、総合的な探究の時間の充実を図りたい。 ○アンケートの取り方や時期などが適切か検証していく。